

蛇紋岩にふとん掛けて（三）

「捨てて来て」嫁さん相当に（プレゼントとして）嫌悪している。

「いつ、どこへ」不燃物であろうが、冷静に判断すると出して良いものか悩む。

それが家のど真ん中に鎮座しているので、とりあえず邪魔にならない所まで移動させようと台座ごと持ち上げようとしたが、重い。台座には隙間や取り掛かりがない。引きずって壁側にとっ思ったが、借家住まい。床のフローリングが相当傷つくことは想像するに余りある。これではゴミ置き場への移動なんて到底無理だ。どうしたものか。

「動かん」独り言のつもりだったが、嫁さん「嫌」手伝うつもりはさらさらない。

「ねえよもたん」さっきから、よもたんティッシュペーパーを箱から出す作業に勤しんでいる。手を借りようとしたが、忙しく手が離せないらしい。無理は言えない。

なんとかこの物体を移動させる方法をさんざん考えた結論は、暫く様子見る。

「動かせんから、暫く置いとく」威厳を以って宣言した。

「邪魔だから、どこかに片付けて」まるでその責任が初めからこちらにあるようだ。

「なら、お前が片付けろ」と喉の奥から飛び出しそうなところをグツと飲み込んだ。

よく考えると、邪魔には違いはないが、その物体（観賞用の石らしきもの）が我々二人と猫一匹にどれだけ迷惑となっているのか、今は只、これまで無かった考えもしなかった異物が単純に「得体の知れないモノ」の意味に於いてのみ排斥している状況である。

しかし、その対象を直視すると、そんなに忌避されるべきモノではないことが見れば見るほどよく分り、むしろその都度、その素晴らしさと奥行きに気付かされる。

実害もないし、購入に強く抵抗したものの嫁さんが旦那に有無も言わず買っちゃったリビングのソファが本来の目的である「座る」から「物置」と転化するのと同様に、その物体がリビングダイニング間の一つのインテリアの一つ、無くてはならないものとして、つまり「付き物」としての存在意義は大いにある。

もし嫁さんの強い抵抗があれば、こちらとしてはソファの撤去を強く求めることとする。つまり、本来の目的以外の利用価値も認めなければならないことである。

とは言うものの、実際この物体に利用価値はあるのだろうか。ソファは人間様にとって現状は物置としてしか利用していないが、よもたん（猫様）にとっては、爪研ぎ（嫁さんに怒られる）や人間観察用の台、ベッド、隠れ場所もしくは隠し場所・・・相当利用目的はありそうだ。果たして、この物体に対しても同様の利用目的が得られるのか。

「ねえよもたん」それを目の前に大きな欠伸一つ。もう警戒心は無くなったようだ。

「よし」ますます「暫く様子みる」に自信が深まった。慣れてもらうしかない。